

平成 30 年 5 月 15 日現在

機関番号：13101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26580032

研究課題名(和文)国内オーケストラの芸術性とマネジメントの定量的評価の試み

研究課題名(英文)Quantitative evaluation of artistry and management of Japanese orchestra

研究代表者

澤村 明 (Sawamura, Akira)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：40334643

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：日本国内のプロフェッショナル・オーケストラ25団体について、お互いをどのように評価しているのかというピア・レビューによってそれぞれの特性を見出すことができるのではないが、というのが本研究の出発点であった。そのため各オーケストラのコンサート・マスターおよび事務局長へのインタビュー調査を企画したのだが、結果として意図したものは得られなかった。うまく進まなかった理由は2点である。1)オーケストラ側の協力がなかなか得られなかったこと。2)協力を得られたオーケストラのコンサート・マスター、事務局長とも、他のオーケストラを聴くことがほとんどなかったことである。

研究成果の概要(英文)：The starting point of this study was that we could find out the characteristics of 25 professional orchestras in Japan by peer review on how we evaluate each other. Therefore, I planned an interview survey for each orchestra concert master and secretary general, but as a result I could not get what I meant. There are two reasons why it did not go well. 1) The cooperation of the orchestra side could not be obtained easily. 2) The concert master and secretary general of the cooperated orchestra did not hear other orchestras hardly.

研究分野：cultural economics

キーワード：orchestra management artistry

1. 研究開始当初の背景

オーケストラを始めとする芸術活動の社会的経済的分析は、文化経済学・文化政策学等の分野でさまざまに行なわれている。ただその多くは、経済的影響や経営面の定量的分析ないし定性的分析と、発揮する芸術性に対する定性的分析とに大きく分かれる。すなわち芸術性についての定量的分析はほとんど見られない。

プロフェッショナル・オーケストラ(以下、プロオケ)を始め芸術活動への評価は通常、専門的鑑定、すなわち専門家による評価である。しかしたとえば、日本のプロオケについて「N響がトップレベルで、次が都響」という音楽評論家等の言説があったとして、その個人の印象評価が正しいだろうか。それは個人的評価に過ぎず、別の専門家の評価と、どちらを信用すべきか。そもそも日本国内 33 のプロオケ全てを継続的に聞いて評価している専門家は存在するのか(ここでいうプロオケ 33 団体とは、公益社団法人日本オーケストラ連盟の正会員 25 団体、準会員 8 団体を指す。なお研究期間中に準会員が 3 団体増加した。なお公益社団法人日本オーケストラ連盟は、以下「オケ連」とする)。

2. 研究の目的

こうした芸術性評価の現状に対し、本研究では、日本の各プロオケが持つ個性や特性の客観的な評価を目指す。定量化した数値による評価によって、受け取る側の誤解は小さくなり、客観性を増す。

芸術活動以外にも、評価する場合に定量的に計測するのが難しい分野はさまざまに存在する。研究代表者はこれまで、文化遺産の経済性や NPO(民間非営利組織)など、「営利に馴染まないもの」についての研究を積み重ね、それらが市場経済体制下でどうすれば存続するかを研究してきた。その中で定量的に計測するのが難しい価値をどう定量的に計測するかにも取り組んできた。また研究分担者はプロオケの経営面などを分析してきた。そうした実績に基づく研究分野の拡大として本研究では、日本の全プロオケを対象に、その芸術性を定量的に計測し、それぞれの経営状況の分析と合わせることで、各プロオケの実力や個性・特性を客観的に評価する。

日本のプロオケ全 33 団体を対象に、それらの芸術性についての定量的分析を試み、それぞれのプロオケが持つ特性・個性の客観的な評価を行なうほか、経営面との関係、たとえば、芸術性の高いプロオケほど経営的に安定しているか等を分析することが当初の目的であった。

本研究は日本で初めて、日本の全プロオケを対象に、それらの芸術性についての定量的分析を試みるだけでなく、その結果と経営面とのバランスまで検討する。単に集客力を見るような単純な評価ではなく、個々のプロオケの持つ多面性・特性を多面的に評価する予

定であった。

3. 研究の方法

当初の研究計画で予定していた研究方法は、三つの個別データの収集に基づき、それらの結果から日本のプロオケについて個々の特性、全体的傾向、カテゴライズなどを行なう予定であった。具体的にデータの収集は以下によるつもりであった。

1) 質問紙調査

全国のプロオケ 33 団体に対し、芸術性と経営面についての相対的順位付け等を記載する質問紙調査を行ない、その結果を統計的に処理する。

設問は芸術性と経営面に大別する。個々の設問は、たとえば芸術性なら 1) 演奏の安定性、2) 演奏の正確さ、3) 演奏の力強さ、4) 演奏の繊細さなど、従来は叙情的に表現されるだけであった内容について尋ねる(具体的設問内容は未定)。各項目について 33 団体の中からトップ 3 を選び、自プロオケが何位に位置するか(あるいはトップを 100 点としたら何点か)などによって相対的な評価を行なう。

各プロオケにつき、常任総監督ないし同等の芸術面のトップ、コンサートマスター(以下、コンマス)、事務局長の 3 者に対し同じ質問紙への回答を求める。このことにより、全体傾向として立場が異なると認識が異なるのかというマクロな結果と、個々のプロオケで 3 者の情報共有・意思疎通の程度を調べる。

2) 各プロオケの事業報告書等の分析

プロオケの多くは公的助成や民間の補助や寄付に依存して経営している。その支出者たる納税者や寄付者に対して、助成・寄付に見合った演奏活動を効率的に行なっているかは厳しく問われる。前者の演奏活動についての定量評価とともに、経営内容を精査することで、たとえば「コンパクトながら芸術性が高い団体」、「芸術性の割に固定費用が大きく改革が必要な団体」、「地方の元気な団体」などの特性が明らかになる。

3) ヒアリング調査

上記 1)2) で数的な把握を行なった上で、上記調査では捉えきれない部分と、定量的評価が定性的な評価と合致するものかの確認が必要である。そのため、33 団体のコンマスと事務局長、可能であれば総監督と面談してヒアリング調査を行なう。

しかしながら後述するように上記 1) については想定を大きく外したため、オケ連の理事・事務局へのヒアリング調査と、日本のプロオケについても造詣があると推薦を受けた音楽評論家へのインタビュー調査を追加して行なった。

4. 研究成果

日本のプロオケの類型化にはいくつかの考えかたがあるが、ここでは日本芸能実演家団体協議会〔2016〕に沿い、以下の4区分とした。

- 1) 特定型: 特定団体の支援の割合が大きいオーケストラ。
- 2) 自主型: 自主運営オーケストラ。演奏家たちが自主的に組織して発展した歴史をもち、特に大口の支援者に依存しないオーケストラ。
- 3) 地方型: 地方オーケストラ。収益の少なくとも3割前後を地方公共団体から得ているオーケストラ。
- 4) 地方一体型: 地方オーケストラのうち、ホールを運営している地方公共団体の文化振興財団等(地方公共団体が出損して設立)が、オーケストラの運営も行っているもの。

これらのうち、今回の研究では2) 3) 4) に属するプロオケを対象とした。

なお当初はオケ連の準会員も対象と想定したが、検討の結果、対象外とした。その大きな理由は、公表されている資料で見える限り、一人当たり人件費の平均額が年間で約211万円以下が最高で、最低は年間14万円と、プロフェッショナルと見なすのは難しいからである。正会員団体でも同じく年間4万2千円という団体もあるのだが、類型上は調査対象とした。

残念ながら、インタビュー調査はほとんど実行できなかった。大きな理由は、どのプロオケも多忙であって対応が難しいこと、また研究組織側との都合が合わなかったことにある。

また当初の想定では、各オケの団員は他のオケの演奏を聴いているのだらうという前提であったが、調査の結果、そのような事実はなく、ほとんど聴いていないということが判明した。聴かない理由としてまず、多くのオケの公演日時が重なることがあり、さらに公演内容が聴きたい演目とは限らない、経済的理由が上げられた。さらに地方のオケは地理的な不利さもある。

ただ、中には「演奏以外ではあえてクラシックは聴かない」と断言するコンサートマスターもいたことから、アーティストとしてのありかたを問う新たな仮説も見出したといえる。かつて庄司薫は「カーネギー・ホールでのホロヴィッツの演奏会の翌日、ジュリアード音楽院では、その夜のホロヴィッツのレパートリーがいっせいに響き出す」と書いていたが(庄司薫〔1978〕p.99)、どうやら日本の音楽界では、そういう光景はなさそうである。

今回の研究での発見としては、コンサートマスターと事務局長との意識が乖離してい

る団体と、一致している団体とが見られ、前者としては、おおむね同じ類型があったことである。

すなわち、自主型では当然、地方型・地方一体型の一部も事務局長は元楽団員が勤めるが、後者の一部で見られる人事として、自治体等の外郭団体であるため自治体職員が出向していることがある。この場合、地方公務員の職務ローテーションの一環であるから、オーケストラについても、クラシック音楽についても常識以上の知識を有しない。そのため楽団員の意識とは乖離が見られる。

たとえば演奏曲目の選定においてもポピュラーな楽曲を演奏することで聴衆獲得を考えるか、挑戦的な楽曲で芸術性を高めるか、その志向性が事務局長とコンサートマスターで真逆の意識が見られるプロオケがあった。

また楽団員の待遇、すなわち給与は、地方緒方・地方一体型で自治体の外郭団体の場合は母体の地方公務員に準拠するため、自主型よりも高額な傾向が見られる。ところが楽団員は業界全体を見るため、特定型のように好待遇なプロオケを基準に待遇が悪いと語りがちであるのに対し、自治体から出向している事務局長にはそれが理解できない傾向にある。

ただし、外郭団体の地方オケの事務局であっても、「子供のころから何度も聴いていて憧れていた」と就職した事務局員もいたので、そうした職員が中核的になっていけば、事務局と楽団の意識の差は縮まっていくと期待できよう。

<引用文献>

庄司薫『ぼくが猫語を話せるわけ』中央公論社、1978

日本芸能実演家団体協議会『芸術団体の経営基盤強化のための調査研究～協会型組織の役割と課題 2016』日本芸能実演家団体協議会、2016

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

大木容子「バイロイト音楽先の伝統と革新」『京都マネジメント・レビュー』査読無、(25)、pp. 1-30、2015

大木容子「BBC Promsの顧客育成と音楽ビジネスへの影響」東洋大学ライフデザイン学部『ライフデザイン研究』査読有、(12)、pp.105-119、2017

中尾知彦「特集：アーツ・マネジメント、文化政策、文化経済学」『三色旗』査読無、(811)、pp.1-10、2017

〔学会発表〕(計3件)

中尾知彦「日本のプロ・オーケストラの財務

の分析とその傾向」, 日本アートマネジメント学会 (名古屋芸術大学) 2015

Takafumi TANAKA, “ Social support for Social Enterprises (SEs) hire handicapped person ”, at ISTR (International Society for the Third Sector Research) -Asia-Pacific Conference 2015, Proceedings p.133, Tokyo, Japan, 201508
Takafumi TANAKA, “ Social support for the new comer Social Enterprise (SE) in social welfare system ”, Paper Title Submission ID 271, at the 5th International Research Conference on Social Enterprise (EMES), Finland, Helsinki, 201507

〔図書〕(計1件)

Takafumi TANAKA, “ Policy analysis I Japan ”, Policy Press (University of Bristol), 2015

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤村 明 (SAWAMURA, Akira)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号: 40334643

(2) 研究分担者

田中 敬文 (TANAKA, Takafumi)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号: 50236600

小林 真理 (KOBAYASHI, Mari)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号: 20308547

中尾 知彦 (NAKAO, Tomohiko)

慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号: 50434535

大木 裕子 (Oki, Yuko)

東洋大学・ライフデザイン学部・教授

研究者番号: 80350685